

故郷（ふるさと）

三年 今野文寛（昭和三四年度）

この間の夜、故郷の話親子三人でしました。

父は生まれて育った鶴岡の町の事や、近く山や川の話をも懐かしそうに聞かせてくれましたが、僕には他処の土地のようで、引きあげた幼時に住んでいたはずの鶴岡もピンとこないようです。母は静岡に生まれて小学校まで福岡で育ち、その後は東京の学校に入ったという事で本当の故郷というものはないといえるのですが、博多のドンタクや太宰府の梅ヶ枝もち等の思い出を懐かしそうに詳しく話されるところを見ると九州の福岡が忘れられないようです。

僕ときたら終戦の年に奉天で生れ、翌年鶴岡に引きあげ、二年余で遊佐にちよつと、そして吹浦の小野曾に小学校に入るまで居て、それからずっと飛島でぼんやり育ったのですから住んだ年月から言えば飛島が故郷になるかもしれません。

この前、青森県上北郡の天間にある葛原の伯母さんの家に行った時、ぼんやりと聞いた事ですが、石川啄木の生家と葛原家とは親類なのだそうです。

今まで母も父もその事についてわざわざ話してくれた事はなかったのですが、その時はちよつとびっくりしました。父が一昨年花巻から風鈴を二つ土産に買って来ました。その風鈴の短冊に啄木の歌が書いてありました。

やわらかに柳あおめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに
かにかくに浜民村は恋しかり思い出の山思い出の川

又、生徒手帳には、

たはたときびの葉鳴れるふるさとの軒ばなつかし秋風吹けば
とありますが故郷を懐しんだ啄木の気持ちにじんできていると思います。

さて僕も歌を一つと頭をひねって見ても才能もないので一向歌心がわいて来ません。しかし将来何処に出るとしても心の故郷である飛島を忘れる事は出来ません。

勉強の方はほったらかしで、九年間ずるずるべったりと過しましたが学校に入った年の夏には水泳も覚え、島船のろもかいも友達なみに習い、幼ころに助からないと思われた身体もたいした病気もせずに一応健康になり、クル病で小学校に入ってからもちよちら、もつちらだつた両脚も何とか細くてもなおったのも空気のきれいな日光の多い静かな飛島で育ったからだだと思います。

竹馬の友という言葉がありますが九年間同じ教室で同じ学校で教育を受けた三十八名の一人一人は一生忘れられない大切な友達です。

春の海、冬の海と洋力と島をめぐる日本海の高原は静かな日はそのままだのように、しけの日は又、そのように、悠遠の姿として心にきざみこまれています。緑なす島影になつかしの友つどう学校生活も、いたずらをした事も、しかられた事も懐かしい故郷の一部です。

世界を結ぶ友つどう学校の先生方の面影も大切な心の故郷の重要な部分です。